千曲會報

昭和十八年十二月二十五日　第三十三、三十四、三十五號　社團法人千曲會

大決戰下、絲繊維業も戰力增強の一役を承つて各方面の考案新研究が要望されてゐる時十一月二十二日偶、當地方の視察に來られた繊維局長陽下に御願ひして全校學生に對して講演を聽講させた、以下は當部の速記の拔萃であるが決戰下に於ける學生の心構えに就いて明示された意義深きものである。之の氣持は同時に繊維業を擔當する會員諸兄にも要求されるものと思ふ、此處に御禮を述べると共に會員各位の御一讀をを乞ふ次第である。

講話

農商省繊維局長　山口鑑

今回蠶絲關係の行政事務を農商省繊維局でやることになりましたことは御承知のことゝ思ひます。私が其れをやつて行くことになりました。蠶絲業は本縣が最も發達してゐるので昨日來此の關係方面を視察することになり此方へ來ております。此の機會に諸君に御目にかゝれて嬉しく思つてゐます。行政關係をやつてゐる私が諸君等の様な蠶絲、繊維化學等の深い學問をやり研究をやる人々に御目にかゝつて御話しする機會を得たことは喜びとする所であるが殘念にも時間が十五分きりないので長い話は出來ませんが極めて簡單でありますが一口に云へば御願ひしたいと思ひます。毎日を過して行く心構え、目標と云つた様なことに就て御話し致します。

私は蠶絲、繊維等に關する學問的な方面は承知してゐません、行政官として今後此れをどうゆう風にやつて行くかと云ふことをやつてゐるのであります、諸君は現在學問をやつてゐるが、がてやは繊維産業の各方面に、又行政官として社會に出るのであります。然るに現在は御承知の様な大戰爭の眞最中であります、斯様な段階であるから勉强どころではないと思はれる方もあるかも知れませんが、私は學問は大いにやつて頂きたいと思ひます。然し只學問の原理だけをつかむと云ふだけでは現段階に於ては困るのであります、今日は此れを活用し應用することが極めて緊要なのであります、然かも此の應用の分野が從來よりも著しく增加して來てゐるのであります。例へば蠶糸にしましても盡だしく惡條件下に於て生産量は非常に多く要求され、然かも從來は輸出品の重要なるものとして思策して來たのでありますが、今後は凡て軍需第一であり、各種の軍需品として各方面に使用され、又は軍需品を造る爲に使用されてゐるのであります。

斯様に蠶絲業の用途は全然變つて來たのであります、諸君は學問するに當つて原理の探求は勿論必要であるが、其れのみならず、今日絹が如何なる方面に使用されつゝあるかを認識し原理を究めて行くことが必要であり又之れによつて適切なる考案發明も出來ると思ひます、此處に研究、勉强の狙ひがあると思ひます、卽ち要點は三つであります。

一、軍需品としての品質
二、必要なる分量を惡條件下に產出する
三、時間の問題

であり、卽ち(三)は今日必要なる時期に必要なる分量品質のものを產出することであります。以上の三點に就て努力される様御願ひ致します。

次に戰爭に就て申上げます、相手國英國は極めて恐るべき國民性を持つてゐます。現在ドイツと戰ひ不利な情態になつてもよく頑張つてゐるのであります、又學生間に於ても所謂學生氣質があつて戰ひに出られる者は進

謹告

會報に付ては毎々御援助を戴き編輯部一同感激の外はありません。所が時局の影響で十月號及十一月號は發行出來ませんでした。其れは用紙入手難のためです、八方奔走しましたが中々困難です。會員各位より多數の御照會を頂きましたが右の事情で御不自由をかけまして申譯ありません。目下出版協會へ入會の手續をとつて極力發行を續けて行くべく努力してゐますが先のことは豫測出來ません。不取敢今月は特別に用紙を融通して頂いて辛じて發行出來ることになりました、從つて體裁や其の他を無視して內容を多くする様に考へました。記事も十、十一、十二月分を一緒にして合冊號としました、會員各位には現戰局を御認識下さいまして御協力の程願ひます、そして勝ち拔くために總てのカを結集致そうではありませんか。

千曲會報編輯部

んで出征し、殘つた者は熟心に産業に從事してゐると想像されます、諸君もどうか敵國の學生に負けない樣に努力して頂きたいと思ひます、前大戰に於て英國には徴兵制がありませんでしたが、參戰すると同時に全國から五十萬の人が志願を申出でており、學生に就ても、オックスホード大學では五千人の學生中四千人は出陣しており、ケンブリッヂ大學では四千二百人の學生中三千二百人出陣して二千人は戰死してゐます、イートン大學では戰死した學生の名前を廊下に揭げ永く彼等の武勳を賞してゐると云はれてゐます。斯樣なことを見てもドイツから爆撃を受けても全學生は大いに頑張つてやつてゐることが想像されるのであります、私は學生諸君が出陣することを希望はしないが、決戰下に於て諸君も敵國の學生に負けないやうにやつて頂きたいと思ひます、卽ち山本元帥の遺訓「常在戰場」の精神を常に體して、每日の勉學に勵しんで頂きたい、其れが今日の現時局下に於て最も必要であり其れによつて凡ての物事を有効に解決する考へが浮ぶものと思ふのであります。

時間がないので甚だ簡單でありますが以上を以て私の話を終ることに致します。

（文責編輯部）

今こそ一億國民必勝邁進の秋だ！

船に就て

柳澤延房

其の三

船が進水する迄の話は之位にして、とゞめて置きますが、地上建物と比べ殊に違ふ所を二、三申し上げますと、船は移動建築ですから先づ重さの制限を受けます。丈夫できへあればいゝといふ譯には參りません。例へば一噸の貨肉があれば、それ自身材料の損失許りでなく、それを動かす燃料を要し燃料が餘分になれば餘分の貯藏場所が必要であり、從つてそれ丈船が大きくなるといふ工合に巡環して、澤山の無駄が次から次へと出て來ます。私共學生時代は軍艦の建造費噸當り二千五百圓だといふ事でしたが現在はもつとずつと高くなつてゐるでせう。今大東亜戰爭をしてゐますが戰艦一隻沈めば一億圓も一億五千萬圓も一時に消えることになります。次に移動的であり波に打たれて動搖するのですから材料の强度が大きな問題になつて來ます。絶えざる波のためローリング、ピッチング、ヨーイング等色々の動搖を受けます。時化になど出逢ひ船の長さと同じ波長を持つた波等が來た時は船は彎曲同樣です。波の山が船の中央に來ると、船の中央は浮力で押し上げられ、兩端が重みで下ります。次の瞬間には船の兩端に波の山が行き、兩端が押し上げられ、中央が重みで下ります。前の場合は船は上凸（ホッギング）に曲り、後の場合には船は下凸（サッギング）に曲げられます。之が絶えず繰返されるからたまりません。悪い設計だと中央から眞二つになつて仕舞ひます。

靜水中であつても、成程全體の船の重さと浮力とは等しく、且つ同一鉛直線上に作用しますが、各部の重さと浮力とは一致しておりません。例へば砲塔やウインチや機關のある部分は大きな重さが掛るが浮力はその割合ひに大きくはありません。そこで或部分には大きな剪斷力が作用し或場所では彎曲モーメントが働き、或場所は張力が作用し壓力が作用してゐます。悪い設計では長い船は海面に浮く所か、割れて沈い

第二十一回卒業證書授與式擧行

決戰體制下に於ける母校の第三十一回卒業證書授與式は去る九月二十三日午前十時より講堂に於て來賓並に父兄多數臨席の下に擧行された。

式は國家奉唱、宮城遙拜、護國の英靈に感謝默禱、皇軍の武運長久祈願に始まり、各科卒業生修業生氏名を呼名し各科總代受證家望月政明君、製絲科相澤甲子郎君、紡織科小林正人君、纖維化學科萩原秀治君に校長より卒業證書を授與、更に實業教育振興中央會（會長岡部文部大臣）表彰狀を全卒業生中最優秀者纖維化學科萩原秀治君へ、又本會よりの針塚賞を各科優等生望月政明君（製絲）、相澤甲子郎君（紡）、小林正人君（紡）、柳澤千代茂君（化）の四君へ授與された。續いて井上校長の次の如き式辭があり、次いで岡部文部大臣祝辭並郡山長野縣知事祝辭の代讀、來賓より中等學校代表上田中學校長、千曲會代表勝又藤夫氏等の祝辭があり引續き祝電祝辭の披露、在校生總代柳田親規君（纖二）の送辭、卒業生總代萩原秀治君の答辭があり、何れも昔烈なる現時の戰局を反映した。訓辭或は力強い心構と熾烈なる覺悟の吐露に終止した。最後に校歌を合唱して嚴かに閉式した。

井上校長式辭

決戰下に於て本日玆に無事第三十一回卒業證書授與式ヲ擧行シ得タルコトハ大棧威ノ許皇軍將兵ノ奮戰ノ賜ニシテ洵ニ感謝感激ニ堪エサル所テアリマス擧式ニ當リテ文部大臣閣下ヨリ祝詞ヲ賜リ且朝野貴賓各位ノ貴臨ヲ辱クシタルハ本校ノ光榮トスル所テアリマス尙父兄各位ニ於カレマシテハ御繁多ノ所御臨席下サレマシタコトハ深ク感謝致ス所テアリマス。

本日卒業玆ニ修業證書授與ノ光榮ヲ擔ヘルモノハ

養蠶科	三四名
製絲科	二九名
紡績織科	二一名
纖維化學科	三三名
選科	六名
合計	一二三名

テアリマス。

吾々ハ卒業生諸子ニ對シ衷心ヨリ祝意ヲ表スル次第テアリマス

本日諸子ト別ルヽニ當リ惜別ノ情轉タ切ナルモノアリ併シ吾々ハ國家非常時ニ當リテ諸子ヲ教育シ國家ノ要務ニ立テシムヘク本日校門ヨリ諸子ヲ送リ出スコトヲ得タルコトニ就キ大ナル誇リト喜トヲ感スルモノテアル。諸子ハ入學以來能ク校規ヲ守リ校訓ニ遵ヒ精勵努力シタル結果今日ノ榮冠ヲ勝チ得タルモノニシテ吾々ハ誠ニ歡喜ニ堪エヌ所テアル。尙ホ諸子ヲシテ今日アラシメタル父兄各位ノ多年ノ御丹精ヲ想ヒ諸子ノ父兄ノ御滿足御喜悅ハ如何許リカト衷心ヨリ祝詞ヲ申シ上クル次第テアリマス。

諸子ハ本日多年ノ親ミアル教室ヲ去リ校門ヲ出ツルニ當リテ在學當時ヲ追想シ今日ノ名譽ヲ深ク喜フテアロウ併シ諸子ハ深ク自ラ反省シ諸子ノ今日アルハ偏ニ聖代ノ惠澤ノ致ス所テアルコトヲ想到シ聖恩ノ廣大無邊ナルニ感激シテ報國ノ信念ヲ一層深クシ國事ニ挺身スルノ覺悟ヲ更ニ固クシナケレハナラヌ。諸子ヲ育テ諸子ヲ學窓ニ學ハシムル爲ニ日夜心勞セラレタル父母ノ鴻恩ニ對シ報恩感謝ノ念ヲ深メ十分ノ孝

うな實驗が可能ならば、大きな船を造る前に小さな實物に相似な模型を拵へ造つて小規模に實驗すれば事足りるのです。かゝる比較則原理を說明すれば大變面白いのですが爰ではその原理の說明は略します。只フロードの比較則の結果のみを申しますと模型と實物との速度の比が、その長さなら長さ、幅なら幅の平方根に比例する樣な關係にあります。於て實驗すれば、その周圍に相似形の流れを生じ、且つ流體の單位質量に働く外力が等しくなります。かゝる關係にある速度を對等速度と申します。今船の長さが模型の長さのn倍ならば模型試驗でVの速度で抵抗がRとなつたとすると曳綱馬力は$R'=X^3R$に比例し從つて實物がその對等速度$V\sqrt{n}$で曳かれた時$R'=n^3R$となり曳綱馬力は$R'=n^3R$に比例することになります。斯くその船と幾何學的相似な小さい模型の試驗から實際の船の必要な馬力が計算出來るのであります。之は主に造波抵抗に對する馬力を計算するに使はれます。かくして最も効率的な模型試驗から効率のいゝ船が想像されるのであります。模型試驗が如何に大切かは之でお解りと思ひます。之はほんの雜氣醒しの餘興ですが、此處に皆さんお馴染の木製の繭形があります。所謂圓形、楕圓形、俵形等です。繭形は日本種、支那種、歐洲種等大分違つた特有の形をしてゐます。昔は野性のもので野山で育つたものと思はれます。只今では屋內で飼育され品種改良や人工淘汰されて居りますが、それでも各土地土地に順應した形が保持されてゐるかも知れません。元、野山の木の枝等に營繭した際その土地の風の强さ等に順應した理想的の形をしてゐるかも知れません。之は船と反對に實物より大きく造つた繭の模型ですが之でフロードの比較則を利用して模型試驗をする積りで造つて見たのです。

最後に一つ船の噸數を呼ぶのに色々の呼び方がありまして誤ることが屢々ありますので參考迄に申し添へて話を終り度いと思ひます。

一、總噸數＝商船內部の容積百立方呎を一噸として計算した噸數で、高さ九尺で六疊敷の日本間の容積は約十噸に當ります。

一、重量噸數又は載貨重量噸數＝貨物船で普通何噸といふのは此の事で船に滿載し得る貨物の總重量でありまして、滿載吃水に於ける重量から船體自己重量を引いた殘りであります。

一、登錄噸數＝貨物、客を積んで船賃を取り得る正味部分の容積で總噸數の時と同じやうに百立方呎を一噸とします。

一、載貨容積噸數＝總船等に呼び船の積載し得る容積で測り、之は四十立方呎を一噸とします。

一、基準排水量＝之は軍艦の場合に呼ばれる艦の重さで、或程度の燃料や豫備罐水を含んだ常備狀態では、一萬噸の巡洋艦といふても一萬七—八〇〇噸になります。

長い時間の御靜聽を感謝致します。（了）

養ヲ盡サナケレハナラヌ。更ニ學窓ニ於ケル鴻大ナル師恩ニ對シ心ヨリ感謝ヲ捧ケナケレハナラヌ。此ノ如ク想ヒ到レハ諸子ノ今日ノ光榮ハ獨リ諸子ノ辛苦ノ結晶ニ止マラスシテ國恩ヲ始メトシテ親ノ恩、師ノ恩等幾多ノ恩澤ノ致ス所テアルコトヲ反省シテ感恩崇敬ノ誠ヲ以テ私慾ヲ去リ公ニ奉シ正シキヲ行ヒ大義ノ爲メニハ身命ヲ賭スルノ尊キ精神ヲ發揮シナケレハナラヌノテアル。是レハ實ニ我國民道德ノ大本テアル忠ト孝トニナルノテアル。諸子カ學窓ヲ出テ實社會ヘノ首途ニ於テ特ニ此事ヲ深ク心ニ銘シテ一層ノ奮勵ヲ望ム次第テアル。今ヤ大東亞戰勃發以來二ケ年ヲ經過シ敢戰ヲ重ネタル敵米英ハ全力ヲ擧ケテ反攻作戰ヲ企圖シ南太平洋ソロモン群島ヲ中心トシテ毎日熾烈ナル戰鬪カ戰ハレツヽアリ一方「ビルマ」ハ八月一日ヲ以テ獨立ヲ宣言シ我國ト協力シテ米英ニ對シテ宣戰シ比島モ亦本年中ニハ獨立カ約サレテ居ル尙ホ南太平洋ニ於ケル我軍政下ニ在ル諸島及馬來等ニ於ケル建設工作ハ着々トシテ進ミ住民ハ悉ク我ニ協力シツヽアリ。此時ニ當リテ諸子ハ學業ヲ卒ヘテ社會ニ出テントスルノテアル諸子ハ深ク此情勢ヲ認識シ決戰下ニ於ケル卒業生トシテ特ニ奉公ノ誠ヲ盡シ各其ノ向フ所ノ職務ニ精勵スヘキテアル。諸子ノ殆ト總テハ召サレテ兵役ニ服シ或ハ征戰ニ從フノ光榮ヲ擔フモノモ少クナイノテアル。諸子ハ常ニ强健ニシテ勇躍軍務ニ服シ本校ニ於テ鍛錬シタル精神ヲ充分發揚シ身命ヲ君國ニ捧ケ來ル英ヲ擊滅シテ國難ヲ克服スヘク大ナル決意ヲ以テ邁進スヘキテアル。

諸子ハ常ニ正道ニ立脚シ思想ヲ堅實ニシ禮節ヲ重ンシ謙讓ノ德ヲ守リ以テ人格ノ向上ニ努力シナケレハナラヌ將來指導的位置ニ立ツヘキ諸子ニ於テハ高潔ナル人格ハモ必要トスル所デアル。諸子カ本校ニ於テ修得シタル學術ハ主トシテ基礎的並ニ應用的概念ヲ與フルモノテアル學術ノ進歩ハ急速ニシテ小時モ止マラナイノテアル諸子ハ多忙ナル社會生活ノ裡ニ在リテモ常ニ勉學ニ精進シ學術ノ進歩ニ遲レサル樣努力シナケレハナラナイノテアル殊ニ戰時下急激ナル轉換ヲナシツヽアル織絲業及其他纖維業界ニ於テハ各部門ニ涉リテ大ナル研究改善ヲ必要トスル所テアル。諸子ハ宜シク本校ニ於テ修得シタル智識ヲ基礎トナシ刻苦勉勵シ斯業ノ改善進歩ニ力ヲ致シ國力ノ增强ニ資セナケレハナラヌノテアル。是實ニ國家カ諸子ヲ養成シタル鴻恩ニ酬ユル所以テアル。諸子ノ進ムヘキ前途ハ決シテ平坦ナルモノテハナイノテアル諸子ハ徒ニ功ヲ急キ或ハ焦慮スル樣ナコトカアツテハナラナイ能ク下積ノ勞苦ニ堪ヘ身ヲ挺シテ難局ニ當リ隱忍自重以テ己カ職分ニ勵ミ切磋琢磨勉メテ倦マス實力ヲ蓄ヘルコトカ將來ノ大ヲ成ス所以テアルコトヲ深ク考ヘナケレハナラヌ。諸子ハ此心構ヲ以テ自奮自勵、明朗闊達ノ氣象ヲ養ヒ能ク人ヲ容レ熟慮斷行至誠ヲ以テ終始スルコトカ將來大事ニ成功スル所以テアルコトヲ深ク慮ラナケレハナラヌ。

母校ヲ廻ル大自然ハ諸子ニ大ナル感化ヲ與ヘタコト、思フ諸子ハ母校ヲ去ルモ此ノ大自然ノ敎訓ト懷シキ母校トハ終生深ク腦裏ニ刻マレテ忘レスカクシテ母校ニ於テ養ハレタル精神ノ發揚ニ努力セラレンコトヲ望ミテ止マナイノテアル。玆ニ諸子ト別レルニ當リテ諸子ノ前途ヲ祝福シ衷心ヨリ成功ヲ祈ル次第テアル。

昭和十八年九月二十三日

上田蠶絲專門學校長
從三位勳二等　井上　柳梧

第三十一回卒業者氏名

（五十音順、括弧内ハ出身縣）

養蠶科本科卒業者（三十四名）

淺田　勝夫（長野）　荒井　瀨（長野）
今生（熊本）　上野　正美（長野）
岩尾　利治（長野）　柿原　修（富山）
遠藤　守（千葉）　川島　浩（東京）
金澤　幸男（長野）　桑島新一郎（群馬）
黑子　等（長野）　小平　一彥（長野）
小出　璁（福島）　塩　猛（長野）
佐々木　敦（靜岡）　清水　政三（長野）
島田猪一郎（長野）　田島　昌（長野）
白石　金造（栃木）　富田　陽一（福島）
寺島　成瀨　正夫（靜岡）
長尾泰次（和歌山）　丹羽　清（長野）
久幸（岐阜）　堀内　嘉雄（長野）
濱　佐加三（長野）　牧野　政明（愛知）
松澤　順平（富山）　望月　久（長野）
百瀨　柳澤　新一（長野）
柳澤　正佳（長野）　山浦　友樹（長野）
渡邊　一（岡山）　渡邊　義人（長野）

養蠶科選科修業者

遠山　嘉孝（長野）　山内　來男（福岡）

製絲科本科卒業者（二十九名）

相澤甲子郎（長野）　相野田文雄（長野）
伊藤　亮（長野）　梅村　彥藏（愛知）
岡　弘（香川）　岡田　喜六（愛知）
大江　勇（大阪）　大田　弘（長野）
大橋　正夫（愛知）　大合　敏雄（兵庫）
方已（岡山）　河合　寬（岐阜）
河原　直美（長野）　川瀨　小木曾勝人（長野）
熊谷　勝治（長野）　佐野　浩正（靜岡）
小松　茂一（愛知）　志摩　哲夫（長野）
清水　悅夫（長野）　高畑　三喜（佐賀）
高岸　恒雄（長野）　高畑　悅夫（長野）
瀧澤　奈良　秋田

中島　一夫（群馬）　野中　尙明（大分）
松尾　五郎（兵庫）　山本　十三（京都）
横田三喜雄（長野）　吉田　俊文（群馬）
和田　一式（長野）　若林　仲明（長野）

製絲科選科修業者

片山　元雄（熊本）　塩田秀三郎（岡山）
布施喜一郎（山形）

絹紡纖科本科卒業者（二十一名）

足高善十郎（奈良）　今泉　進（愛知）
岩井　實（群馬）　上原　鈞也（長野）
大澤　茂（長野）　小野　貞雄（長野）
金澤　鎭雄（東京）　北澤　一也（長野）
久保　早（長野）　小相澤秀雄（長野）
小林　正人（長野）　櫻井　幸男（長野）
芝野　大吉（大阪）　關　昭夫（長野）
千脇　正勝（千葉）　寺西　德夫（長野）
栃原　泰夫（群馬）　馬場　博史（長野）
堀内　龍男（長野）　望月　英明（長野）
山本　周三（長野）

絹紡纖科選科修業者

臼田　隆夫（長野）

纖維化學科本科卒業者（三十四名）

市村　朗（長野）　飯島南海夫（長野）
岩崎　俊男（長野）　小木曾俊夫（岐阜）
片山　敏（長野）　唐澤　郁夫（長野）
栖澤　俊信（長野）　窪田　作永（長野）
小出　直人（長野）　小林　孝平（長野）
清水　岩雄（長野）　下村　徹夫（長野）
代田　久郎（長野）　塩塚　良二（長野）
竹内　明人（長野）　辻本　哲作（奈良）
土屋　貫一（靜岡）　中澤　正司（長野）
中島　守雄（長野）　中平　修（愛媛）
中本新一郎（和歌山）　仁熊　毅（京都）
長谷川俊彥（愛知）　平井　克巳（大分）
尾藤喜代志（愛知）　三石　義人（長野）

水野　方邦（岐阜）　宮下　睦夫（長野）
村上　玄（長野）　柳澤千代茂（長野）
山本　正也（岡山）　吉田　正信（長野）
渡邊　博（東京）　萩原　秀治（長野）
（以　上）

科學以前の心

蠶二〇生

故寺田寅彦博士の高弟で雪の研究の大家である中谷博士の隨筆に表題の様な一文がある。

それは氏の四高時代の生活を書いたのであるが。下宿のお婆さんと時間の數へ方について面白い論爭？をしてゐる。

お婆さんは、十一時にねて朝七時に起床すれば九時間睡眠であると云ふのに對して中谷さんは當然八時間であることを主張する、それでは十一時に寢て十二時に起きたら何時間寢たことになりますかといふ問に對して、お婆さんは指を折つて數へて見て二時間と答へたが少々不安になつて來る、結局十一時に寢たら十一時を數に入れてはいけませんね、とはれてお婆さんの答がふるつてゐる。

「學問のある人はうまいことだまくらかしなさる」と、（樹氷の世界）

この會話に對して中谷さんは獨特の面白い解釋を下して結局か様な考へ方を「科學以前の心」と云つて笑つてゐる。

自分達の學生時代蠶實習等で蠶の食桑時間を出す時、掃立何日目といふことゝ經過日數との食ひ違ひに、この所謂「科學以前の心」と似たものと戰つて苦心したことを思ひ出して思はず苦笑してしまつた。

考へて見ると、吾々の日々の生活の中にはか様な考へ方が可成り横行してゐるのじやないだらうか、漢學の素讀を重視した昔の教育の中には科學的に推理を進めることを飛び越して、ある結果を暗記して實用化してゐることが相當ある様に思はれる。私の隣組にもこんな人がある。

この人もおそらく素讀式の教育を受けた人らしく算盤を持つたら加減乘除が自由であり乍ら、筆算や暗算はてんと判らない、金錢の出納は算盤と密接不可分の關係にある、か様な人達は二一天作の五といふ御題目の様な眞理？を頑迷に暗誦して、恰かも天來の妙香不拔の原理かの如く堅く信じて、そのよつて來る所は恐らく一度も考へたことがないのだらうと思はれる、吾々の頭からするとその一足飛びに譯の判らないことを暗記する努力は驚異の眼を以つて眺められるのであるが、その人達にはその御題目の實用化の美事さに滿腹して、その理由を根掘り葉掘り探ぐる面倒さ？は想像も及ばないことらしい。普通教育の普及してゐなかつた明治時代の便宜的な教育の香りが濃厚に殘つてゐて、それが今日、科學の戰爭に、科學の振興に少なからぬ障害を及ぼしてゐることであらう。

然しよくふりかへつて自分を眺めて見ると、これは程度の問題であつて、吾々も毎日々々、科學的の事實についてこの御題目的な眞理？をそのまゝ鵜呑みにしてゐることがないとは云ひ得ないのではないだらうか、唯その飛躍の幅が昔よりだん〳〵狹くなつて來たのであつて、千年後の人類は現代の人類の飛躍的な考へ方に「科學以前の心」と云つて冷笑するかも知れない、尤も前の二一天作信者と今日の吾々との考へ方の根本的な相違は吾々の日常接してゐる大部分の事象について、恰も劇映畫のフヰルムの様に一駒一駒が科學的因果の連絡を持つてゐるが如く考へるか、切り離したフヰルムの散亂の如く統一連絡がないかである。この後者の場合が「科學以前の心」であり、迷信であり、インチキ宗教の一部であらう。

もう一つ「科學以前の心」を讀んで感じたことは年月の經過といふことである。

百萬石の殿様が毛槍を振つて參勤交代に江戸へ登つた時代の時間と、一國の首相が政務の寸暇に占領地を飛び廻る時代の時間とでは、正に雲泥の相違がある。

そこで下宿のお婆さんの時間と中谷さんの時間とは、その時計の針の動き方が徐程違うのじやないだらうかお婆さんの一時間は吾々が一日二日と日を數へる場合の様な莫然とした中味のある一時間であり、中谷さんの時間は無限の一瞬を流れ去る時をつかまへてゐる様に思はれる。

汽車の發達で山間の住民にも何時何分といふ分といふ時間が重要になつて來た。

物理學では何億光年といふ距離や時間を考へてゐる一方秒の何萬分の一といふ様な世界を論議してゐる様であるが吾々もうつかりしてゐると「科學以前の心」でのほんと一生を終つてしまふ危險がありそうである。

（昭和十八年十月三十日）



科學點描（15）

繼續篇から駒

（蠶の新雌雄鑑別法）

蠶の斑紋による雌雄鑑別がX線による科學の夢の實現である事は前に述べた。（會報一九號）

最近の發表によると、今迄閑人の手慰み位に考へられてゐた遺傳因子の研究が愈々必要缺くべからざる事になつて來た。

即ち研究によるとW染色體に附着したコブ（前報參照）が小さければ小さい程蠶の實用形質が優れて來る事が判明した、從つて目下このコブに目的の斑紋遺傳子のみを殘してあとを切り取る事が着々と行はれてゐる。

蟲が切り取ると云つても眼に見えない小さな染色體であるからノコギリで切る様な譯には行かない、矢張りX線の力をかりてゐる次第である。そこで切れたといふ事が蠶の卵か幼虫か蛹か蛾かの形質に現れて來る様な目當が欲しい譯である。

Wに附着したコブは蠶の第二染色體である事が知られてゐるので、この染色體上に存在する遺傳子を多數發見しこれを見當にする事が是非共必要な譯である。その眼印さへついたら後の進歩は期して待つべしと考へられる。

時節柄飛躍的進歩による百年長期戰を勝ち拔く爲に敢えて基礎的研究の必要性を強調し度い。（日本蠶絲學雜誌十四卷、一、二號より）

蠶二〇回卒　市川信一

母校便り

小林一治少尉應召

母校教官小林少尉に應召令下り〇日午後四時二十六分上田驛發にて職員學生多數の見送りの裡に勇躍〇〇に向け出發せられた。學生課では曩に小山少尉の應召あり更に今回小林少尉の應召をみたわけである。只管武運の長久ならんことを祈つて止まない。

柳澤延房教授御轉任

母校絲製科に席を置かれてゐた柳澤先生は九月二十五日付を以て新設の長野高等工業學校に御轉任されることになつた。同先生は東大造船科の御出身で母校へ御赴任になつたのは昭和十四年八月、在職期間滿四ヶ年で專ぱら數學、力學、機構學、水力機械學、電氣學を擔當せられ指導に研究に實に御熱心であつた。特に其の研究「家蠶繭形の數學的表示と營繭中に於ける蠶の運動」は第四報まで報告され、此の方面に於ける貴重なる開拓的研究であつた今回懇望され同校航空工學科の要職に就かれることになつたもので、母校にとりては多大の損失であるが國家の爲先生の爲、今後此の方面に於ての御活躍御發展を祈る次第である。

大原賢治氏急死さる

製絲科に副手として勤務されてゐた大原賢治氏は九月二十日夜家庭防空訓練に從事中腦溢血で卒倒し、翌二十一日午前八時看護の甲斐なく遂に四十八歳を最後に永眠された。殉職の爲御葬儀は二十五日午後一時から上常田區葬にて區民並學校職員多數參列の下に盛大に擧行された。故人は大正十一年七月より製絲科に勤務され爾來二十二年間生絲整理の學生指導に科の業務に默々精勵され製絲科の爲に盡力、貢獻する所多大であつた。あまりの急逝にてお氣の毒に堪えず只管御冥福を祈る次第である。

野外教練施行

今年度の秋季野外教練は次の日程にて施行された。

第二學年　自九月二十六日　至十月二日　輕井澤にて

第一學年　自十月六日　至十月十二日　鹿澤にて

第二回長距離競走

十月二十三日母校では本年度第二回目の長距離競走を行つた。行程は前回同樣埴科郡鼠橋まで十八粁で全校學生により行はれた。個人及び級の成績は左の如くであつた。

個人成績

一等　化一　淺野俊治　一時十九分三秒
二等　絲一　目取眞武　一時二十分十秒
三等　蠶一　田中惠一　一時三分三十二秒
四等　紡二　前田　貴　一時三分五七秒
五等　化一　丸山　泉　一時三分十八秒

級成績

一等　紡織科　二年
二等　織維化學科　一年
三等　蠶科　一年
四等　紡職科　一年

勤勞奉仕

決戰下食糧增産に協力するため、母校では十月二十五日より三十日まで六日間全職員學生を四班に分ち近接農村の神科村、北堰尻村、川邊村、中堰田村の四ケ村に出動した。全員一致敢闘日下多忙を極むる秋の收穫作業に奉仕した。

第二次教練査閲

十月二十一日午前九時より校庭に於て金澤師團司令部倉石忠一郎少將の査閲が行はれた。初頭に教職員編成の母校報國隊の閲兵分列を行ひ直ちに學生の各種教練の嚴格なる査閲に入つた。午後三時より防空演習を行ひ終つて査閲官の講評が行はれ終了となつたが、奮闘努力の甲斐あつて査閲官より「良好」との講評あり決戰下の學徒の意氣を示した。

第一回行軍競走

決戰下學徒の行軍力を增進する目的の下に、母校では十一月六日本年度第一回目の行軍競走を行つた。行程は長距離競走の時と同じく埴科郡鼠橋まで十八粁で全校學生により行はれた。個人並級の成績は左の通りであつた。

個人成績

一等　紡二　前田　貴　一時間六分五秒
二等　絲一　目取眞武　一時間六分三秒
三等　化一　淺野俊治　一時間三分四秒
四等　蠶一　田中惠一　一時間四分五五秒
五等　蠶二　伊藤文男　一時間六分四五秒

級成績

一等　蠶科　一年
二等　織維化學科　一年
三等　絲織科　一年
四等　紡織科　一年

坂口助教授應召

織維化學科の俊秀として講義に研究に奮闘されてゐた氏に應召令下り全校の熱烈なる聲援に送られて十一月〇日勇躍出發した坂口氏は千曲會報編輯部同人として活躍しておられたので發行に大いなる支障を被ることになつた、然し一億の總力は米英打倒に注がれねばならない秋、吾等は坂口氏の御出征を祝福すると共に幾久しく武運の御出度きを心から御祈りする次第である

金井圖書課雇應召

圖書課にあつて校内全員の心の糧の出納取締等に寧日なき程の活躍をしておられた金井氏に應召令下り十一月〇日勇躍目的地に出發した。戰も愈々熾烈を加えつゝある時、益々御自愛御自重の上更に〳〵に大戰果の擴大に協力されんことを御願ひすると共に氏の武運長久を御祈りする次第である。

短歌

繁樹

事しあらばものな思はじ武士の
この御代にして輝かしけり。

〇〇珠江

海軍見習士官合格と
師に告ぐ學徒等の瞳の輝き。

出陣學徒壯行會竝假卒業證書授與式擧行

決戰下學徒の徵兵猶豫停止により母校では〇〇名が學園を後にして勇躍米英撃滅に出陣することになつた。十一月十九日之に供ふ冒頭の擧式が午前九時より校庭に於て行はれた。此の日校長先生の餞の心をこめて挙行した日の丸を袈裟掛にした學徒を中心に職員及び學生一同整列し次の次第にていとも嚴肅に行はれた。

國歌合唱の裡に國旗揭揚、宮城遙拜必勝祈願默禱、後假卒業證書授與竝假修業者發表、續いて井上校長先生の贈書奉讀、壯行の辭があり、在校生代表藤野晶一君（化學科二年）の壯行の辭之に對し出陣學徒代表田中宗一君の烈々たる答辭あり「海行かば」齊唱、征く者送る者眞に感激の場裡にひたつた終つて分列式、聖壽萬歲、出陣學徒の記念撮影があり、それより軍樂隊を先導に全員一同市内護國神社大神宮へ歩武堂々の行進を起し只管に必勝祈願と武運長久を念じた。歸校後校歌合唱、更に出陣學徒の萬歲を高らかに三唱して征で立つ學徒の壯行式典を終へた。

出陣學徒の一人、纖維科第一學年生竹内信哉君は今日の感激を次の詩にうたつてゐる

讀み來たる書物に靜かに栞とぢ
　召に應へて吾は征くなり
若櫻散るぞ何か惜しからめ
　散るか櫻の生命なりせば

今こそしばし筆を置いて出で發つ學徒の氣持は全部之の詩に盡きるものがあらう、吾等は出で發つ若人の武運長久を心から御祈りする

假卒業者氏名

纖維科（十三名）

池田　滋　金子敬誠　倉本重雄
小林次郎　小村一陽　柴田正見
五月女省三　中西　晶　西原光英
三村寛一　森田孝之　柳田親規
和田昭次

製絲科（十四名）

岩崎泰久　岡野琢也　鹿住周平
佐藤文富　島田　猛　關根碩琅
高橋　登　竹内純司　永野裕貞
羽重次郎　畑中八郎　牧　壽雄
山口榮一郎　葉　啓源

絹紡織科（九名）

岡本光夫　大井忠幸　春日正德
田中宗一　藤森敏夫　武藤　武
丸山　強　山越　肇

纖維化學科（十三名）

飯田一郎　上島良隆　小山田峻
栗本正知　小林正平　佐久間啓
佐藤雅久　芝田祐二　田中政佐
中澤　泉　保川房男　山本治彦
廬　圖

本會記事

本會日誌

九月十五日　鳥取地方の震災に對し支會長へ見舞狀發送す

九月十八日　新入會員歡迎會開催す

九月二十五日　會報九月號發送す

九月二十八日　坂口進氏戰病死を遂げらる野口理事弔問す

十月五日　理事久保田正樹氏の住所變更登記す

十月六日　故青木茂美氏の公葬執行せらる本會を代表し寺本秀吉氏會葬す

十月八日　理事及監事會開催第四回總會の件協議す

十月十三日　故岡部康之氏に對する有志弔慰金贈呈す

十月十四日　總會開催中止の件に關し各支會長へ照會す

十月十八日　本田圭吉氏逝去せらる弔詞を呈す

十月二十二日　出版事業令に基く會員指定斡旋願提出す

支會長交迭

左記の通支會長交迭せり

熊本支會長　新任　緒方　良純
同　退任　若林新一郎
北陸支會長　新任　佐藤良太郎

會費領收（月日現在）

入會金納入者

完納者

田中　光雄（纖元）　長尾　泰次（纖三一）
濱　佐加三（纖三一）　松澤　順平（纖三一）
望月　政明（纖三一）　柳澤　新一（纖三一）
柳澤　正佳（纖三一）　渡邊　一（纖三一）
遠山　嘉孝（纖三一）　丹羽　久幸（纖三一）
金澤　幸男（纖三一）　塩　瑞（纖三一）
島田猪一郎（纖三一）　山浦　友樹（纖三一）
荒井　漸（纖三一）　岩尾　今生（纖三一）
太田　運雄（絲元）　髙村　弘（絲元）
若林　伸明（絲三一）　相澤　清正（紡元）
坂根宗太郎（紡三一）　臼田　隆夫（紡三一）
櫻井　幸男（紡三一）

昭和二十二年度會費金四圓也

島田猪一郎（纖三一）　山村　洋介（絲三一）

昭和二十一年度會費金四圓也

島田猪一郎（纖三一）　山村　洋介（絲三一）

昭和二十年度會費金四圓也

島田猪一郎（纖三一）　山村　洋介（絲三一）

昭和十九年度會費金四圓也

山村　洋介（紡三〇）　細田　增郎（絲三〇）
田路　治男（紡元）

昭和十八年度會費金四圓也

福富　繁（纖七）　鍵谷　傳（纖七）
髙橋　氾一（纖八）　勅使河原保（纖八）
金崎　眞英（纖九）　池田正五郎（纖一）
川島熊太郎（纖一）　宮崎　秋雄（纖三）
西本　朝平（纖三）　山本友之亟（纖三）
笹本　保雄（纖三）　池田　善三（纖三）
兒玉　信敎（纖三）　松本　一二（纖六）
井澤　喜三（纖六）　關　芳男（纖六）
坂口孝保（纖七）　北條五郎右衞門（纖七）
田村　亮（纖七）　野里　秀直（纖七）
六川忠一郎（纖八）　笠原　四郎（纖八）
河淵　益美（纖八）　三瓶常四郎（纖八）
池内　眞吾（纖九）　桐生　義文（纖九）
小平　耕平（纖一九）　齋藤　章（纖一〇）
清水　洸（纖一〇）　新野元治郎（纖一一）
中島　正喜（纖一一）　小林　輝夫（纖一一）
鈴木　重孝（纖一一）　奥村　忠治（纖一一）
吉田　信伍（纖一一）　久保田不二夫（纖一一）
戸塚　一（纖一四）　內藤　康三（纖一四）

會田誠司（鑛三五）　島田博（鑛三五）
矢野進（鑛三五）　近藤員夫（鑛三六）
森三郎（鑛三六）　箭山佳夫（鑛三六）
長澤得榮（鑛三六）　佐藤三夫（鑛三七）
柳澤一郎（鑛三七）　阿武忠雄（鑛三八）
井上貞二（鑛三八）　池田逸郎（鑛三八）
半田孝康（鑛三八）　松尾卓見（鑛三八）
洗雄（鑛三八）　近藤昌孝（鑛三八）
小泉一助（鑛三九）　三上俊宏（鑛三九）
佐藤豊藏（鑛三九）　三輪勝美（鑛四〇）
神山友樹（鑛四一）　丹羽久幸（鑛四一）
栗原保定（絲七）　戸田耕三（絲七）
西孝重（絲八）　堀忠太郎（絲九）
北澤茂雄（絲一〇）　合田信一（絲一一）
太田正治（絲一二）　白井要範（絲一二）
岩田正（絲一二）　金野嚴保（絲一二）
神戸敏夫（絲一三）　兒玉來（絲一三）
湯澤稔（絲一四）　則信忠雄（絲一四）
關嘉四郎（絲一四）　笠原豊（絲一五）
佐野忠二郎（絲一五）　三木辰男（絲一六）
藤井溫彥（絲一九）　丸山勳（絲二〇）
矢島文男（絲二〇）　吉越榮夫（絲二三）
久保井左武郎（絲三三）　山口悠紀男（絲三三）
井生茂（絲三三）　村上義美（絲三四）
和田利章（絲三四）　磯部鉄雄（絲三五）
太田速雄（絲三五）　塩入重雄（絲三六）
箕輪三治（絲三六）　濱田秀彌（絲三六）
高橋一郎（絲三七）　藥師寺宏吉（絲三六）
高村弘（絲三七）　江崎勝（絲三八）
田爪正記（絲三八）　兒玉忠雄（絲三八）
西村義雄（絲三八）　羽生英尚一（絲八）
橋本正太郎（絲七）　小林一千（紡二）
岡享四郎（紡一）　立木七郎（紡四）
鈴木一郎（紡三）　山本佳良（紡六）
細井政吉（紡四）　佐藤治男（紡九）
早田充利（紡一七）　田路幸一（紡一〇）
東海林誠治（紡一九）　岡田隆（紡二）
宮村賢（紡二〇）　田代紀人（紡二）
坂根宗太郎（紡二）　橋詰隆夫（紡三）
宮本千秋（紡三）　臼田豐（化）
矢崎

昭和十七年度會費金四圓也

關芳男（鑛一六）　鈴木重孝（鑛三三）
多田作造（鑛三三）　片山文一（鑛三五）
三上俊宏（鑛三九）　神山豐藏（鑛三九）
大久保孝一（鑛三九）　湯澤稔（絲一四）
宮下文四郎（絲三〇）　太田速雄（絲三五）
塩入重雄（絲三六）　高村弘（絲三七）
田路治男（紡一九）　坂根宗太郎（紡二）

未納會費納入者

金拾貳圓也
（昭和十四、十五、十六年度分）
湯澤稔（絲一四）
太田速雄（絲三五）

金八圓也
（昭和十五、十六年度分）
塩入重雄（絲三六）
田路治男（紡一九）

金四圓也
（昭和十五年度分）
小笠原精三（絲八）

終身會費納入者

倉澤一二三（鑛一七）　岩尾今生（鑛三一）
西孝重（絲八）　小松忠一郎（紡三）
今吉築郎（紡五）　相澤清正（紡一九）

敍任辭令

現職奏之部

上田鑛絲專門學校教授　柳澤延房
任長野高等工業學校教授、敍高等官五等　八級俸下賜（九月二十五日）
上田鑛絲專門學校長　井上柳梧
賜一級俸（九月三十日）

舊職員之部

勳四等　春日井新一郎
敍勳三等瑞寶章（九月十一日）

卒業生之部

公立中等學校長　波多野千里
年功加俸年額貳百五拾貳圓下賜（三月三十一日）
高等官三等待遇（九月一日）
同　教諭　櫻井弘吉
八級俸當分千參百八拾圓下賜　年功加俸年額百九拾貳圓下賜
（以上六月三十日）
同　石川健丸
六級俸下賜（八月十二日）
正七位　稻田實
同　大池登
敍從六位
正八位　中村由枝
若井弘
敍從七位（以上七月十五日）
公立實業學校教諭　糟谷遠三樓
七級俸當分千五百八拾四圓下賜　年功加俸年額金百九拾貳圓下賜（十六年三月四日）
篠ノ井高等女學校教諭　松野外史
公立中等學校教諭ニ任ス　高等官七等待遇　右同校教諭ニ補ス（九月三十日）

公立實業學校教諭　齋藤鳳一
八級俸下賜（二月二十七日）
同　弓田弘
六級俸當分千七百貳拾圓下賜
同　安部和
七級俸當分千五百參拾圓下賜（以上三月三十一日）
地方技師　皆川二郎
七級俸下賜
同　井上兵一郎
十級俸下賜
公立中等學校教諭　北澤周一
七級俸當分千五百八拾圓下賜（以上九月三十日）
同　近藤正巳
本職ヲ免ス（十月十八日）
任陸軍司政官　敍高等官四等（十月十九日）
公立中等學校長　藤原卓之
七級俸下賜（九月三十日）

御挨拶

謹啓　時下秋冷の候各位益々御清穆奉賀上候、陳者私儀臺北帝大農學部在學中は甚だ疎遠勝ちにて失禮の段御容赦被下度候、今般母校副手を拜命し養蠶科に勤務致す事に相成候に就いては一層御指導御鞭撻を賜り度奉懇願候
右不取敢御禮旁々御挨拶迄如斯御座候
敬具
昭和十八年十月
養蠶科病理教室　半田孝康

本校辭令

副手兼講師　赤羽是壽
願ニ依リ副手ヲ免シ兼講師囑託ヲ解ク（九月三十日）
副手ヲ命シ養蠶科勤務ヲ命ス（十月四日）　半田孝康
副手　松林元一
願ニ依リ副手ヲ免ス（十月十三日）
渡邊一
副手ヲ命シ養蠶科勤務ヲ命ス（十月二十三日）
副手　神林至
願ニ依リ副手ヲ免ス（十一月一日）
副手　叶澤弘
願ニ依副手ヲ免ス（十月十一日）

銃後資金募者

（頭書ニ(2)トアルハ第二回醵出者）

2金六圓也　青木　靜志
2金壹圓也　戸塚　一
右合計金七圓也
累計金壹千六百四拾八圓四拾錢也

訃報

遺族よりの禮狀

愛知縣海部郡津島町筏場
故青木茂美氏　父　青木　三郎
公葬の際會葬に對する禮狀（十一月十一日）

上伊那郡西箕輪村四〇五七
故原　利直氏　妻　原　フミ
有志弔慰金に對する禮狀（九月十八日）

上田市松尾町
故中村　繁氏　兄　中村　昌壽
右　同（十一月十五日）

愛知縣海部郡津島町筏場
故青木茂美氏　父　青木　三郎
有志弔慰金に對する禮狀（十一月十八日）

群馬縣多野郡藤岡町
故蓮沼光治氏　父　蓮沼　龜作
右　同（十一月十九日）

三重縣津市乙部朝日通五ノ八六四
故楠森定男氏　兄　楠森眞十郎
右　同（十一月十九日）

南安曇郡豐科町
故三原磊藏氏　父　三原儀十郎
右　同（十一月二十四日）

福島縣相馬郡原町本町五丁目
故有間正久氏　妻　有間　榮子
右　同（十一月二十五日）

福岡縣久留米市兩替町
故井上正人氏　兄　井上　勇
右　同（十一月三十日）

弔慰金報告

故蓮沼光治氏弔慰金
金壹圓也　中島　正喜　河越　哲男
右合計金貳圓也
累計金五拾四圓五拾錢也

故原英三氏弔慰金
金貳圓也　大田　愼一
右合計金貳圓也
累計金貳拾四圓也

故中村繁氏弔慰金
金參圓也　湯本益次郎
右合計金參圓也
累計金四拾參圓也

故加藤四郎氏弔慰金
金五圓也　宮崎　博
金參圓也　片山　文一
金貳圓也　猪坂　哲郎　神山　豊藏
岡田　幸一　本多　孝
右合計金拾六圓也
累計金四拾圓也

故矢澤登氏弔慰金
金貳圓也　會田　誠司
右合計金貳圓也
累計金參拾六圓也

故森本爲之助氏弔慰金
金貳拾圓也　永井　眞吉
金拾圓也　橋本　武光
金五圓也　上林多兵惠　久保田昌人
森田　三郎　皆川　二郎
上野　榮仁
吉田　榮治　山崎　壽
久保田正樹　河野　太郎
万石安太郎　金崎　眞英
湯澤　稔　小笠原精三
金貳圓也
金壹圓也　今村　良鄉
右合計金七拾八圓也
累計金百六拾五圓也

故小見益男氏弔慰金
金拾圓也　佐藤利一　早乙女新一郎
金五圓也　山本岩三郎　坂田　榮雄
神保　喜久　久保田正樹
竹内五之助　小林　庸
岸　善亮　佐藤　尙雄
沖　濤治　上野　榮仁
倉澤　美德　渡部　齊
堀　忠太郎　萩原　清治
西山　市三　石坂虎治郎
上林多兵惠　宮田鉄五郎
小宮山太助　森　千城
塚田　鎭磨　堀江　尙
香山　清和　手塚芳太郎
山岸　松次　皆川　二郎
久保田昌人　金崎　眞英
今村　良鄉　中島靜太郎
金參圓也
金壹圓也
右合計金參拾九圓也
累計金百九拾四圓也

故松井正次氏弔慰金
金拾圓也　渡部　齊
金五圓也　本橋万三郎
右合計金拾五圓也
累計金四拾七圓也

故向井孫一氏弔慰金
金貳拾圓也　大橋富治郎　彼末武猪
北村育穗　君雄　黒岩
北澤茂樹　宮尾　行雄
金參圓也　山本金之助
右合計金貳拾參圓也
累計金貳拾四圓也

故岡部康之氏弔慰金
金五拾圓也　唐木田藤五郎
金拾圓也　佐藤　利一　万石安太郎
湯川　秀夫　宮前　邦雄
鶴田　定平　森田　三郎
金五圓也　原田　親雄
小山　久一　吉村　眞作
絹村　貢　上野　榮仁
本橋万三郎　金崎　眞英
曾山　直高　石坂虎治郎
倉澤　美德
金參圓也
森　千城　中島　茂
太田愼一郎　中根　眞一
久保田正樹　岡村　源一
金貳圓也
上林多兵惠　久保田昌人
坂口　育三
金壹圓也　塚田　鎭磨
右合計金壹百八拾圓也
累計金參百四拾圓也

故關只氏弔慰金
金參圓也　今村　良鄉
金壹圓也　加々井精喜
右合計金四圓也
累計金七圓也

故吉川道寬氏弔慰金
金五圓也　甲本　正道
金貳圓也　小笠原精三
金壹圓也　塚田　鎭磨
右合計金八圓也
累計金八圓也

故村山晋氏弔慰金
金拾圓也　河合　英一
金五圓也　坂巻　文彦
右合計金拾五圓也
累計金貳拾圓也

故瀧澤令朝敎氏弔慰金
金貳圓也　藤井　聰夫
金壹圓也　香山　清和
金五圓也　宮村　賢
累計金八圓也

故本田圭吉氏弔慰金
金參圓也　沖　濤治
右合計金參圓也
累計金參圓也

故大原賢治氏弔慰金（十一月三十日現在）
金拾五圓也　大瀧照太郎
金拾圓也　林　貞三
金五圓也　窪田　潤
金四圓也　荻原　清治
志田　敬夫　内藤　榮吉

金參圓也　茨木　こう
金貳圓也　白井　美明
堀内　波　連子
柳澤　須藤　靜子
金壹圓五拾錢也　柳澤　延房
金壹圓也　田中　信重
山佳　炳熙
高野　銀二郎
松林今朝一郎
松坂　博貞
森澤　桑子
山邊　勝代
青木婦美代
寺内　賢子
熊井壽美子
小山　幸江
山崎みさを
小泉　所
湯澤　稔
金五圓也　大木　定男
金參圓也　市原　文雄
右合計金八拾貳圓也

弔慰金募集

故小兒　益男氏（證　三）
締切期日十二月末日
故松田　豐二氏（證井七）
故瀧澤今朝教氏（紡　二）
故村山　晉氏（絲　九）
締切期日昭和十九年一月末日
故坂口　進氏（紡　十）
故片山　元雄氏（絲卅一）
故本田　圭吉氏（紡　六）
故藤井　科氏（絲　五）
締切期日昭和十九年二月末日
以上八氏に對し弔意金を募集致します。右締切期日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ樣振替口座長野六二四三番へ各故人に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい

昭和十八年十二月

社團法人　千曲會

片山君昆倫丸にて遭難す

去る九月希望に燃えて製絲科を卒へ、滿州へ勇躍赴任の途にあつた同君は去る十月十日昆倫丸にて敵の犧牲となつた、吾等は同君の御冥福を祈ると共に勝ち拔く決意を新たにし米英擊滅を誓ふものである。

故中曾根長男氏遺兒養育資金受領報告

金五圓也　中島角太郎
右合計金五圓也
累計金壹千八拾五圓也

故大原賢治氏（本會賛助會員）弔慰金募集

謹啓　高堂愈々御淸適の段奉賀候　陳者本校製絲科助手大原賢治殿には去る九月二十日夜上田市に於ける防空訓練に出場屋上に於て勇敢に活動中腦溢血を發して倒れ、家族及隣組員の手厚き御看護の効果もなく二十一日早朝遂に死去致し候

上田市に於ては卒先防空陣頭に起つて活動せし氏の死去を悼み、名譽の殉職と認め區葬を以て盛大に弔はれ候（別記參照）同氏は副手として、吾が製絲科に勤務以來精勵恪勤實に二十二年有餘の長きに亘り、或は學生の指導に、或は又事務的方面に努力せられ其の間全く何等報いられることなく、今日に至りしは吾等一同深く敬意を拂ひ且同情致しおりし次第に候

御家庭には未亡人と今春上田高等女學校專攻科を卒へられし唯一人の御息女とが殘され今後の御方針にも御惱みおられることゝ御推察申上げる次第に候

就いては同志相計り特に弔慰金の募集を計畫致し些か氏の功に報い度き所存に候間左記御諒承の上御賛成賜はり度伏して御願ひ申上候　敬具

昭和十八年十月三十日

發起人代表　林　貞三
外五十名（氏名略）

記

一、期　日　昭和十九年二月末日迄
一、送　先　上田蠶絲專門學校千曲會
（振替東京四三三四一又は長野六二四三番）又は林貞三宛
大原賢治氏弔慰金の旨明記送金
一、贈呈方法　發起人一同に御一任被下度候
一、領收證　會計報告書を以て領收書に代へ度候

大原さんの思ひ出

茨木　こう

去る九月廿一日、火曜日、此の日は十年一日の如く私の早出當番の朝でした、すつかり拭き掃除をすませて、出勤簿を押しに校長室へ入つた時、丁度七時半頃でした。餘りよくつかない朱肉を强く押してゐる時、宮本さんが入つて來られました。そして、「大原さんが、むづかしいですよ」「今日一日もたないさうだ」とのお言葉に、私は自分の耳をうたがひ、「ハアー何ですか、大原さんがどうかしましたか」と遂口に出て了ひました。

「ゆうべ防空訓練中、惡くなつたさうですよ」まあ！さうですか、それは大變と、思つて大急ぎで湯呑所へ行きました。日頃湯呑所の方々とは一番親しく語り合つてゐらつしやいましたので先づその方達へと、おしらせ致しました。併し私の思つたより皆さんは、それ程とも思はれず「今に志田先生がおみえになれば樣子がわかるでせう」と落ちついてゐられました。けれど、私は何となしじつとしてゐられず、一寸ひと走りと思つて大急ぎで校門を出ました。門の時計が八時十五分前でした。高嶺猿の前まで行つた時、お宅の前に大勢人が集つてゐましたので、隣組の方に「どんな御樣子でせうか」と、お尋ねしました處「お氣の毒でした。只今昨を落した庭です」餘りの事に案内も乞はず奥の御居間へ！何と申し上げる言葉もなく…奥樣と徹子樣のお側へ。そして先生の枕元へ…。

生けるが如き溫容と云ふ言葉は聞いてゐましたが、正にその通りでありました。急病死の故でもありませうが、まるで、よく眠つてゐるかの樣でした。

「大原先生！」と呼べば、起きさうな氣さえいたしました。昨日まで、あんなにも、お元氣でグライダーの練習を御らんになつてゐられましたのに……。

丁度九月廿日の航空記念日に、縣下中等學校の滑空機競技會を、本校校庭

で催す事となり、二、三週間も前から小蠶生徒が毎日盛んに練習をしてゐました。

一隊の生徒が二列にならんで「用意ツ引けツ」の號令に、機首にかけたゴム索を曳いて歩き出す。オーニツオーニツと、聲も、足もよく揃つて……ゴム索がピンと張る「放せ。」と云ふ號令一下、機尾の止金が放たれ滑りだした機は、すぐフハリと空中に舞ひ上る滯空約〇分、東南隅の林?と思つた瞬間、何の事もなく左に旋回しながら靜かに、スーツと、音もなく、電車線路のすぐ前の處で着陸した。

「へえーうまいもんですねえ。さすが二等滑空士の先生だけある」と感心してゐた大原さん。果してその日はお宅へ歸られて、模型飛行器を飛ばせて、「ほうらよく飛ぶ〳〵早くきてごらん」と、奥様やお孃さんに話しかけられ殊の外朗に興がられてゐらしつた由ですのに。何とまあ一夜の中に再び物言はぬ眞白いお顏に變つて了ひました。

一昨年、川向ふの火事の夜、急に飛び起きて外へ出られ、フラ〳〵してお玄關へ入るなり倒れ、その時は絶對安靜で注射をしたり、瀉血したりして、命拾ひをなすつた様でした。それ以來御自分でも大變病氣を心配され「何時死ぬかわからぬ。せめて娘の卒業するまでは」と醫藥はもとより、桑の根や海草類を根氣よく用ひてゐられた様でした。荻原先生にお灸の本をお借りして腰部八點灸を始められたのも、その頃からでした。時折、私も肩が凝るの胃がわるい等と申しますと「茨木さんも、お灸だ〳〵お灸をおやりな」等と大變お元氣でした。それで今年は春蠶の乾燥の時も、生憎のくる度に、行つたり來たり忙しくかけてゐられましたが、一日、二日お休みになつた位で、大した事もなく無事にすぎました。いよ〳〵秋になつて此の頃は又格別にもお顏の色もよく血壓も百六十ミリだ等と喜こんでゐられました。そこで「先生…もうすつかり御丈夫になられたですね」と云へば…「まあ…何がきいたかお灸もたしかにいゝやうな氣がする」等と云はれ、又「それでも一旦ヒバの入つた體だから…まるで爆彈を背負つてゐるやうなものさあね…何時どこで破裂するかわからない」等と云はれ、時折「〇〇大學教授〇〇博士四十八、腦溢血にて講演中倒る等々の新聞記事が目についてしようがない」等とも云つて居られました。

廿日の夜防空訓練の時は、始めて屋根の上でバケツを綱で下す役だつたさうですが…何回も〳〵練習して最後の時は、もうバケツが自由にならないしく、五つも六つも停滯したとか、夜目にてそれが誰にも病氣とはつゆわからず、側の人と交代したさうですが…ものゝ一二分もたゝない中に屋根の上で、人事不省になられました由、家族の方々にも、一言だに殘す言葉もなくほんとうに夢の様に逝かれて了ひました。

お宅の方々も、さる事ながら、製絲部としましても、今まで長い間何かと世話役をつとめられ、愛え婚禮始め送別會、歡迎會病氣見舞等々近頃は又時折の配給品までも、お世話下さる先生而も毎朝、南に北に大戰果のニュースを始めとして、刻々進展する政府の方針まで、細々と話された先生、その先生を亡くして私共は一入深く秋の淋しさを感じます。殊に先生は學生や生徒に對しても誠に寛大で慈父の様でした生絲檢査の實習の時、こわれ易い學生の一寸手を出して見たい様な器械器具は生徒の見えない處へ入れておかれ、いつも、きちんと整頓されてゐました日の短かい冬の實習の時、四時になつても、學生が然え殘りのストーヴから離れず、小使さんも、私達も早く歸つてくれるといゝ等と思つてゐる時「下宿へ歸つても、寄宿舍へ歸つても暖かい炬燵があるわけじあなし…まあいゝさあ」と云つてゐる大原さんでした。御病氣になる前までは盆栽や菊花作りに餘念もなく、先生のお宅へ入選した菊を拜見に伺つた事も再三ありました併し最近はお好きな菊作りも、すつかり斷念されまして「國策ですよ。ヒマでも植えよう」と云はれて、今も尚主なきヒマは鈴なりにみのつてゐます。

終りに先生の一番お氣にかけてゐられた一人限りの愛孃徹子様は今春上田高女專攻科をめで度く御卒業遊ばされ直ちに市内城下國民學校に奉職されました。たとへ半歲足らずとは云へ、先生としておつとめのお孃様のお姿をみて、どんなに御安心だつた事か……。而も家庭防空の華とうたはれ、盛大な區葬を營まれた事は、日頃何かにつけて「國策ですよ」と、云ひ〳〵したのと思ひ合せて、ほんとうに先生らしい御最後であつたと、悲しみの中にも、それでもと云つたやうな力強い氣持で永遠のお別れを致しました。

大原さんと私は今を去る廿有餘年前本校製絲部に奉職致しましたのが、偶然にも同じ年でした。隨つて思ひ出も人一倍多いわけですが…至つて筆不性の爲ほんの一端を述べて失禮させていたゞきます。

昭和十八年十一月八日七七忌を迎へて

會員動靜

（　月　日現在）

齋藤　菊雄（蠶六）日本蠶絲製造株式會社原料課（東京都京橋區京橋三ノ二片倉館）

仲内　靜（蠶二）碓氷地方事務所（群馬縣碓氷郡安仲町）

笹本　保雄（蠶二五）山梨縣蠶業取締所韮崎支所

宮崎　秋雄（蠶二五）長谷川合名會社（山形縣東置賜郡屋代村竹森）（住）山形縣東置賜郡屋代村）

山本　誠（蠶二五）岩手縣農政課（住（盛岡市上田組町二丁目

池田三之助（蠶二六）福島縣梁川高等女學校（福島縣梁川町）（住）福島縣伊達郡粟野村大字粟野字中通三六番地

内苑　殿吉（蠶二六）宮城縣是非共榮蠶絲株式會社仙南工場宮城縣刈田郡白石町大字白石字楓小路

北條五郎右衞門（蠶一七）蠶業試驗場岩村田支所

濱村　一彦（蠶一九）長野縣蠶業取締所上田支所

赤池　勝男（蠶二三）蠶業試驗場上田支所

町田　史郎（蠶三〇）
西澤　良一（蠶三一）
米澤　俊吾（蠶三二）
羽藤　泉（蠶三三）
上原　眞德（蠶三四）
北原　幸治（蠶三五）
齋藤　重利（蠶三六）
清水　英人（蠶三七）
楠八重行雄（蠶三八）
藤澤　豊（蠶三九）
森本　彰（蠶四〇）
井上　貞二（蠶四一）
清水　彰（蠶四二）
田中袈裟平（蠶四三）
大久保幸一（蠶四四）
柿崎　泰彦（蠶四五）
古平　福紀（蠶四六）

三上　俊宏（蠶四七）
戸谷　澄（蠶四八）
綠川　榮一（蠶四九）
山口　秀一（蠶五〇）
遠藤　利治（蠶五一）
柿原　修（蠶五二）
川島　守（蠶五三）
島田猪一郎（蠶五四）
田島　政三（蠶五五）
堀内　清（蠶五六）
柳澤　新一（蠶五七）
山浦　友樹（蠶五八）
水野　健吉（蠶五九）
梅澤治三郎（絲一）
御子柴義之（絲二）
湯澤　稔（絲四）
赤松　與一（絲六）

東部第四九部隊
東部第五五部隊
東京產業報國會事務局（住）東京都神田區末廣町四七番地
西部第八一部隊（留）愛知縣越智郡九和村字桂
奉天省公署實業廳經濟科
（住）埴科郡杭瀨下村大字新田四三七
（勤務先）從前通り（住）長野縣小諸町壽町
東部第四八部隊
三菱第二菱南寮內（名古屋市港區龍宮町一番地）出張
第八五〇五部隊
中部第三七部隊
北支派遣軍甲第一六四九部隊
（公用）（留）上田市新參町五六二八
滿洲第三一二部隊
緬甸派遣軍司第六八二五部隊
北部第一六部隊
東大附屬傳染病研究所食品防疫研究室（東京市芝區白金町）（住）東京都品川區大井出石町五〇〇三　第二大森山莊內
東部第一一六部隊見習士官
豐橋第二陸軍豫備士官學校
豐橋第二陸軍豫備士官學校
橫須賀局氣付ウ一一ウ四二經由海軍澤部隊
新潟醫科大學（住）新潟市旭町二番町　板倉千代方
那是工業株式會社本社蠶絲部京都府何鹿郡綾部町（住）同上男子寮道光館
土浦海軍航空隊
新潟醫科大學（住）新潟市學校町三番町五三二三番地村山ちの方
館山海軍砲術學校
那是工業株式會社（京都府何鹿郡綾部町）（住）（同上道光館
日本蠶絲製造會社（東京都麴町區有樂町一丁目七（住）東京都澁谷區櫻丘町五番地　香雲莊內
片倉普及團（松本市蠶玉町）
交易營團橫濱支部　支部長（橫濱市中區山下町五八番地ライジングサンビル三階）
東亞金屬工業株式會社土山工場（住）兵庫縣加古郡二見町福島
三井物產株式會社濟南支店（中華民國山東省濟南市經五路緑入路）
（住）大阪府吹田市泷池町二ノ二二八〇
日本蠶絲製造會社資材課（東京都京橋區京橋三ノ二片倉館）

林　秀門（絲一九）
小林　進（絲二〇）

長野　彰（絲二一）
征矢　克郎（絲二二）
秋山　實（絲二三）
土生　狛二（絲二四）

村上　義美（絲二五）
原口惣一郎（絲二六）
飯田　國藏（絲二七）
井上　次郎（絲二八）

藥師寺宏吉（絲二九）

阿部　信夫（絲三〇）
荒木　榮（絲三一）
伊藤　祐七（絲三二）
小林　武志（絲三三）
鷹野睦二郎（絲三四）
松崎　滋（絲三五）
羽生　英尙（絲三六）

スマトラ島派遣軍富第一〇三六五部隊囑託
那是工業株式會社事業部（京都府何鹿郡綾部町）（住）京都府何鹿郡綾部町東本町
北支派遣鷲三九〇八部隊
（住）東京都目黑區大岡山一二九
南海派遣猛第四六三〇部隊
滿洲國柞蠶興業株式會社（安東省鳳城縣鳳城街翰墨六四六）
八日市陸軍病院（滋賀縣神崎郡御園村）
兩井縣繭檢定所（福井市有樂町）
滿洲國牡丹江第三〇軍事郵便所氣付滿洲第二八六部隊
九州帝大農學部農藝化學科學生（住）福岡縣久留米市兩替町六〇
日本揮發油株式會社研究所橫濱工場（橫濱市中區最戶町一〇〇）
中支派遣鏡第六八一四部隊見習士官
東部第一〇二部隊
中支派遣原第七九三五部隊
中支派遣專第九四三三部隊
滿洲國奉天省鐵嶺市鐵嶺郵便局氣付滿洲第一九四二部隊
日綿實業株式會社青島支店（青島市館陶路十一號）
東部第四〇部隊

編輯後記

前揭理由により會報の發行が出來なかつたことを御詫び致します。千曲會の血管にも相當する會報ですから何んとかして用紙を入手し、今後發行を續けて行きたいと思ひますが、然し時局の要請であれば發行不能となつても仕方がありません。

編輯部同人中坂口氏の應召に會ひ今後の仕事に大きな支障が出來ました、之又勝ち拔く爲には仕方がありません

一億國民が千古未曾有の感激に浸つた第三回目十二月八日が來ました、あの日　畏き大詔を奉戴して宿敵米英擊滅に敢然として立上つて以來正に三年吾等の身心は第一線の戰果を聞く度に振ひ立つと共に各地に善戰苦鬪する皇軍將兵に感謝を捧げるものであります

來るべき第四年目も三千會員總力を結集して國家の要請に向つて決意を新たに致しませう、向寒の折り會員各位の一層の御自愛を祈ります。

昭和十八年十二月二十日印刷（非賣品）
昭和十八年十二月廿五日發行
上田蠶絲專門學校內
編輯兼發行人　荻原清治
上田市原町五七九五
印刷人（中長三〇）中澤二郎
上田市原町五七九五
印刷所　中澤印刷所
上田蠶絲專門學校內
發行所　千曲會
法人組合
電話上田四〇六番・六六一番
振替口座（長野）六三四三番